本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第48号　2020年3月1日（毎月1日発行）

旧三上郡三十三か所霊場⑮
ふるさとの巡礼地を訪ねて

第三十三番札所　庄原 雲龍寺

朝ごとく 軒場はれゆく 雲龍寺
のぼる日かげぞ 松間もりくる

（朝がくるたびに雲龍寺の軒先が朝日で輝いている。松林の間にも光が届くように、この世のどんな場所でも仏法は明るく照らしてくれる。）

「庄原にあり、松翁山と号し曹洞宗なり。もと阿弥陀寺と称せしが、寛永九年（一六三二）伊藤包直再建。白翁長伝を請じて開山となし、その時今の寺号山号に改めたりといふ。」（比婆郡誌）

伊藤四郎（俗称包直）は当時の永江の庄（庄原市本町）の庄屋。白翁禅師は、西城町浄久寺の高僧である。

御詠歌の額面は、境内にある「子安観音堂」の側面の梁に掲げられ、立派な額縁の中に納められている。そばには「重本又市」という額縁の寄進者が墨書された木札。額面の保存状態も良く、これで結願だという想いを強くした。

祭壇に対座して、観音像が安置されている厨子に向かって礼拝。無事に三十三か所の札所巡りを終えることができたことを感謝した。

「安産祈願で老人の間ではよく知られている観音像には、仏像信仰によくでる偶発的な由来がある。年代は不明だが、本堂を寄進した包直翁がある夏、西城川で遊んでいた時に川を流れる物体を見つけた。拾い上げてみると観音菩薩像。家に持ち帰り、信仰すると諸事成就し、特に安産にご利益があった。翁は仏恩に驚き、早速、境内に観音堂を建て、観音像を安置した。」（中国新聞・県北の「社寺」）

終戦前までは安産祈願の観音像として地区民の信仰を集め、「安産守り」の腹守りを求めて若い母親がよく訪れたという。

この観音像は秘仏で、厨子の扉は通常は閉じられたままである。

◇　◇　◇

「ふるさとの巡礼地を訪ねて」の連載がスタートしたのが二〇一八年十月号、一年半かけて三十三か所の霊場を紹介することができた。

原点となった「旧三上郡三十三か所霊場探訪記」（以下、「探訪記」と略称）が編纂されたのは一九八三年三月、取材を始めた時には三十五年の歳月が流れていた。果たして、札所はまだ存在しているのか。あるいはその痕跡を今でもとどめているのか……。

その心配は概ね杞憂であった。今でも近在の人々によって、大切に守られている札所がほとんどだった。ほぼ忠実に、探訪記の記述をトレースすることができた。しかし、これから先の十年はわからないというのが正直な感想である。地域住民の高齢化が進んで、話を聞ける人がどんどん少なくなってしまう……。

最近、「山里の唄」（倉冨良枝著）という本を読んだ。山口県下の山村の暮らしを回想した内容で、今回「郷土の本棚」で紹介しているので、興味のある人は読んでほしい。

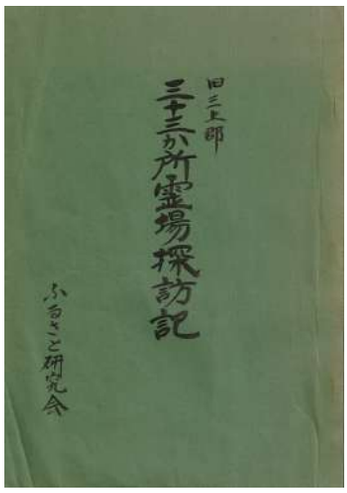
大師信仰の厚かった土地柄で、地区内の「お大師まいり」（八十八か所の霊場巡り）のことが書かれている。「八十八か所の札所は広範囲であったから、二泊三日の日数がかかったようである。白装束に金剛杖をついた古老の先達（せんだつ）さんを先頭に、長い列が続いた。」

「道端のお大師様の前には、お米やお札、お賽銭を入れる箱や笊が置かれている。順路には集落ごとに札所があった。そこには先達さんの読経に合わせて般若心経を唱え、チリンチリンと鈴（りん）を鳴らしながら、御詠歌をあげていた。」

「そこにはお接待所があって、一休みするための筵（むしろ）が敷かれ、小豆飯で作ったおむすびや、お茶の接待が出された。」

まるで情景が浮かぶようではないか。旧三上郡三十三か所霊場の札所も、こんな雰囲気ではなかったか。

次回は、霊場巡りの総集編の予定です。



火村霊神
無実で火刑された怨霊を鎮魂

第三十二番札所である西明寺の裏手の方に、合同庁舎の建物があるが、その敷地の一角に、「火村霊神」を祀った石碑がある。以下、石碑のそばに掲げられた解説文の要約である。

今から三百五十年以上も前の話。当時の安芸と備後の国は、福島正則が治めていた。この福島正則、加藤清正と比肩される猛将だが、若いころから鼻水を垂らす癖があったという。

その福島正則が、庄原地方で狩りを催した。家来を大勢引き連れての狩りは、地方の地理や民情を調べることや、殿様の威光を民衆に見せつけたり、家来を訓練するなどたくさんの目的を持っていた。

その家来の中に木村という侍がいた。この木村氏が正則に向かい「この辺には羽斑鳴（はまだらしぎ）がたくさんおります。さあ、早く鉄砲でお撃ちください」と申し上げた。それを正則は「はなたれしぎ」と聞き間違えた。「おのれ家来の分際で、殿様のわしを洟垂れとののしるとは何事か。火あぶりの刑にせよ」と命令した。

木村氏の弁明も周囲のとりなしも聞き入れず、さらに激高した正則は、立っている辺りで木村氏を焼き殺してしまった。こうした非道な行為も重なってか、正則はその後、広島五十万石の領地を失うことになる。

無実の罪で火刑に処せられた木村氏は、弔う人もなくそのまま打ち捨てられていたが、その後、庄原の町に度々大火が起こって、町全体が焼け野原になってしまった。すると誰言うことなく、これは木村氏の亡霊の仕業に違いないと噂されるようになった。

これ以上、たたられて火事を起こされてはたまらないと町民一同相談の上、処刑の跡に石碑を建ててその怨霊を祀り、また西浦に小さい社（やしろ）を作って春と秋にお祭りをすることにした。それで木村氏の怨念も鎮まったのか、それ以降、庄原の町には大きな火災は起こらなくなったという。

「火村」は、後の人が「木村」を「ヒムラ」と間違えたのか、木村氏が火に焼かれたのでわざと「火村」にしたのかはわからないが、「火村霊神」として今も市民に崇敬されている。

石原慎太郎『太陽の季節』
――退屈な大人社会への決別

“太陽族”の言葉を生み、上っ面に理解されたことは否めませんが、一編の小説がこれほど若者風俗に衝撃を与えたのは珍しいことです。石原慎太郎『太陽の季節』（新潮文庫・他）です。戦争の後遺症を引きずった『二十四の瞳』からまだ3年経っていませんでした。

文芸誌「文学界」に掲載されたのは1955年、神武景気が始まる年です。芥川賞の選考では委員が、賛同と反対に別れて激しく論争した結果、芥川賞を獲得します。

主人公の竜哉は、拳闘にひかれて2年の時に大学の拳闘クラブに入ります。手強い相手を睨（ね）めつける時、「何事にも感じることのなかった、新しいギラギラするような喜び」を感じるのでした。

竜哉たちは、東京のキャバレーに出入りして女遊びをしますが〈大学生の分際なのに〉、手元不如意の日、3人連れの女性に声をかけて、英子と知り合います。竜哉も英子もそれぞれに他の異性たちと関係を持ちながら、2人だけの肉体関係を深めていきます。戦後10年の当時としては、驚愕に近い若者たちです。

それだけではありません。例えば、竜哉は、昔鍛えたのだと明るく声をかけてきた父親の腹筋に思い切りパンチを見舞い、父親は一寸血を吐きます。彼ら若者たちは、「徳と言うものの味気なさと退屈さをいやと言うほど知って」いて、大人の秩序を無意識に壊そうとしているということでした〈大人社会への反発〉。

喧嘩もします。キャバレーで踊っていて足先を踏んで知らぬ顔の男を、おびき出し、強烈なパンチを見舞います。「大切なことは、自分が一番したいことを、したいように行ったかと言うこと」だと言います。行為の後に反省があったとしても、「成功したかしなかったか」だけだというのです。

ノーベル賞作家カミュの「異邦人」では、見ず知らずの男を5発の銃弾で射殺し、理由として「それは太陽のせいだ」と述べ、不条理の文学として反響を巻き起こしました。竜哉にも、それと似たところがあります。

ボクシングの時の残酷さで、竜哉は英子を攻めるのです。そんな成り行きを、作者は饒舌なまでの論理を駆使して、心理描写してみせます。

でも成り行きは、カミュに比べるとズッと穏やかです。夜に2人きりのヨットで沖に出て、月明かりに英子が「純愛」を感じ、展開が急転していきます〈超ハイソです〉。

伊豆半島の葉山の別荘に女たちを誘って仲間が集まり、一悶着があります。英子が煩わしくなった竜哉が、兄の道久に5000円で英子を「売る」のもこの時です。この行為も、世間的にはひんしゅくを買います。

竜哉の子を宿した英子は、堕胎に失敗して急死します。竜哉は葬儀の祭壇の遺影に香炉を投げ、「馬鹿野郎っ！」と叫び、「貴方達に何もわかりゃしないんだ」と、結末を迎えます〈純愛ものの成り行きです〉。

読者は、ハイソな世界のまばゆさに幻惑されたとも言えます。こういう豪奢で奔放な男女の関係は、一挙には進みませんでした。日本はまだ、人々が貧困の中にありました。

次回は、山代巴『荷車の歌』を取りあげます。

また読んでみたい本㊽
――――青年たちに

音谷 健郎

【新潮文庫版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第48回は、石原慎太郎の『太陽の季節』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

虫と草木と人びとと㊱　中村慎吾

「草花の博物誌――早春」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

サンインシロカネソウ　ヒマラヤがルーツの貴重種

谷間の木々がようやく芽を大きく開き始めた頃、サンインシロカネソウはもう花ざかりを迎えています。

シロカネとは白銀のこと、花の色が白く銀を思わせるような感じがするので白銀草と名づけられましたが、サンインシロカネソウは白銀ではなく黄色です。

花をよく注意して見ましょう。梅の花のように大きく五枚に開いているのは花びらではなく、それは萼片（がくへん）なのです。萼片の内側を見ると、細い柄の先に黄色の球をつけたようなものが五つ見えるでしょう。それが花びらです。セツブンソウで大きく花びらのように見えたのは萼片で、ほんとうの花びらはその内側に小さく棒状になっていたのと、同じ構造になっているのです。

シロカネソウのなかまはヒマラヤから中国大陸中部の雲南、四川、貴州、広西、広東、浙江そして、台湾、日本の本州、四国、九州にかけて約十八種が知られています。シロカネソウのなかまは遠いはるかな大むかし、ヒマラヤをルーツにしてアジアの温帯域に分布を広げた植物、植物地理学の上で「日華区系」と呼ばれている貴重な植物なのです。

日本に約十八種といわれているシロカネソウのうち、八種が分布していますが、サンインシロカネソウはその中の一種、福井県から島根県東部までの雪深い谷間に点々とごく僅かのところに分布しています。広島県ではただ一ヵ所神之瀬峡だけに生育しているとても貴重な植物です。サンインシロカネソウは遠いはるかな大むかし、ヒマラヤから渡って来たシロカネソウの祖先が雪深い山陰の谷間で独自の進化をとげた植物といえる珍しい植物です。

地球環境の温暖化がささやかれる中、いつまでも生き続けて欲しいもので、そのためには私たちはもっと環境問題に関心を持ち、環境保全のため行動を興さねばなりません。

アマナ　日本古来のチューリップの野生種

まだ、野原は枯草におおわれ、その間からそろそろ若い芽が伸び始めた頃、もう、アマナは細長い葉を伸し、葉の間から茎を伸して、つぼみをつけています。やがて、春の陽ざしが野原にそそぎ、春風がそよぐ頃、アマナは茎の先に白い花を開きます。

花は茎の先に上向きにつき、六枚の花びら（花被・かひ）と六本のおしべ、一本のめしべからできています。花被ということばがでてきましたが、ユリのなかまの花のようにど

れが花びらで、どれががくなのか区別がむずかしいとき、花びらとがくをまとめて花被と呼びます。

アマナの花のつき方、花のしくみはチューリップそっくりです。ですからアマナはチューリップ属Tulipaに属します。今、チューリップとして庭に植えられている草花はアラブ諸国に広く分布していた野生のチューリップが改良されて栽培されるようになり、やがて十六世紀、トルコからヨーロッパへ紹介されて改良がすすみ、今、私たちの見ることができるさまざまな品種が生れたのです。いいかえると、アマナは日本に古くから自生しているチューリップの野生種ともいえます。

アマナは甘菜、つまりあまい菜という意味です。アマナを掘ってみると、かわいらしい球根がついています。この球根は苦味やピリッとした味もなく、煮たり焼いたりしてすぐ食べられるところからアマナと名づけられたようです。アマナの球根にはカタクリと同じように良質の「でんぷん」がふくまれているので、むかしは「山慈姑（さんじこ）」と呼び、そのでんぷんを体の弱い人や赤ん坊の栄養補給の薬にしていたようです。

野原が荒れているこの頃、アマナはだんだん減りはじめています。総領町の岡田國茂先生は野原を丹念に草刈りして大切に守っておられるので、その野原は一面にアマナが咲きほこっています。アマナの群生するこの野原を訪ね、草花を守ることとはどんなことか学んでみてはいかがでしょう。

（写真はいずれも小川光昭氏撮影）

老いの雑記帳㉕
何をしている？

ひと仕事終わってタバコに火を点け、ほっとしている時などに思うことがある。「○○は今、何をしているだろうか？」と。

○○はその時によって異なるが、大抵は家から離れている家族の誰かである。ロサンゼルスに居る長男や嫁さん、それに孫であったりする。武蔵境にマンションを買ったばかりの二男や、調布に住む娘の場合もある。

それぞれ独立して元気にやっているのだから別に気に掛けることなど無いのだが、ふと脳裏をかすめるのだ。特に心配して思いを馳せるというのではなく、ただ何となく「今、何をしているのかな？」と思うだけである。

仕事（？）に没頭している時はその事に集中しているからそんな思いも湧かないのだが、ボサッとしている時が多くなったこの頃はそれが目立つようになった。ひとり暮らしが長くなったのが原因かもしれない。それとも死期が近付いたのかも。

電話をかけたり、メールを送ったりする回数も増えてきた。その度に返事は「元気だよ」である。人のことより自分自身のことを考えればよいのに、どうもそうは行かないのだ。持って生まれた性分だからどうしようもないのだが、無意識に寂しさからくるストレスが蓄積され続けているようである。

「思いのままに～我が心の雑記帳～」（鈴木澄夫著）より

春竜胆

――現代御伽草子㊷

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

でっぷりとした身体を濃紺の背広に窮屈そうに押し込んだ男が、店内に入って来た。

「へえ、けっこう広いやないか」

額がかなり後退した丸顔は、どう見ても五十を超えているが、ぞんざいな口調はあんちゃん風で、老け顔なのかも知れない。

後に続いて、小柄な老人が入って来た。視線が合うと、「こんにちは」と丁寧に会釈された。ヤギ髭をたくわえた顔は仙人然としていて、どこかで見た記憶がある。あれこれ記憶をさぐってみるのだが、どうしても思い出すことができない。

「井戸先生、奥にも部屋がありますよ」

その声で、記憶の糸がつながった。井戸塀太郎、歴史小説の分野で異彩を放つ作家である。まるで現場を見て来たかのような臨場感のある描写が特長で、わたしも何冊か読んでいた。寡作だが、どの作品も力作で、外れのない作家だった。

（今日は確か、隣町で講演会があったはずだが……）

週末は店を開けているので、休日の行事には参加できないという事情はあったが、行きたいという欲求も乏しかった。対人がしんどくて、古本屋になったのだ。活字になった本が好きなのであって、それを書いた作家にはあまり興味はない。

（それにしても、どうしてうちのような所に来たんだろう）

歴史小説を書くには膨大な資料が必要だ。司馬遼太郎が次の作品に取り掛かるときには、その作品に関連した古書籍や資料が神田の古本屋街からすべて消えたという伝説がある。

うちのような一般書籍を扱っている古本屋に、何を期待して立ち寄ったのか。

「ご主人……」

隣室から丸顔を覗かせて、客の一人が声を潜めて手招きする。

「あそこのガラスケースに、青い花が描かれた皿がありますやん」

茶器や古民具などの骨董品を入れているショーケースだった。以前は医薬品が陳列されていた。実家の薬局を古本屋に改装したときに、捨てるのも面倒だと、知人の骨董品を委託販売することにした。

「春竜胆（はるりんどう）の絵の皿ですね」

「ああ、そうなんだ」

初めて耳にする花名なのか、男が曖昧に頷いた。

「その皿を目にしてから、先生、動かなくなっちゃってね」

腕組みをしたまま、ガラスケースの前に立っている井戸塀太郎の後ろ姿が見えた。

「相当な名品みたいやね」

わたしは苦笑を浮かべた。

「あの皿は大正時代の量販品で価値はないと、骨董に詳しい人が言っていました」

「でも、けっこういい値をつけてるやないですか」

十五万円の値札をつけている。古伊万里並みの価格である。わたしは沈黙した。説明するのが面倒だった。説明したとしても、理解してもらえるとは思えなかった。

「いい色ですね」

井戸塀太郎が振り向いた。

「藍色……、いや、はなだ色かな」

縹色と書く。奈良時代から使われている青色の名称で、花田色とも書かれ、略して花色とも言われた。もともとは露草の色で、夏に露草の花を摘んで、搾った汁を和紙に含ませて保存し、染めるときに花の色素を水に溶かして布に移すことから「移し色」とも呼ばれた。しかし、この青は非常に褪せやすく、縹色は次第に藍で染めるようになったという。

「悲しみを経験して、縹色がさらに深くなっている……」

作家らしい表現をした。しかし、わたしがこの皿を初めて見たときの感情をずばりと言い当てられたような気がした。

「売ってもらえませんか？」

丸顔がエッと声を上げた。

「実は……、売り物ではないのです」

「ちゃんと値札がついてるやないですか」

丸顔が抗議した。
「わたしのお気に入りで、いつもそばにおいて見ていたいので、ガラスケースに入れておいたのです。高い値段をつけたのは、買われることがないようにとの用心のつもりで……。とても値札に見合うような価値はありません」
「十分に価値はありますよ。この値段でいいので、売ってください」
熱心に言われて、心が動いた。
「お願いします」
深々と頭を下げた。そのまま低頭して、返事を待っている。
「わかりました。お譲りします」
老作家が顔を上げて破顔する。
「ただし、値段は五百円です」
鳥取の古本屋をセドリで流しているときに、リサイクルショップで出会ったのがこの皿だった。
「売り物ではないので、買ったときと同じ値段でお譲りします」
縁の一部が欠けているので、こんな値段になったのだろう。
「いや、それでは申し訳ない」
しばらく押し問答が続いて、最後は一万円札を押し付けられて落着した。
（まるで、昔の恋人に逢ったようだったな）
皿の入った紙袋を抱くようにして出て行った老作家の背中を見送りながら、苦笑を浮かべた。自分であれば、いくら気に入っていても、値札を見て諦めたはずである。単に経済力の違いだろうか。
（本当に売れるとはな）
皿の消えたガラスケースを見て、わたしは明らかに喪失感を覚えていた。
「そろそろ機嫌を直してくれないか……」

フリー百科事典ウィキペディアより転載

自室の机の上に立てかけられた皿に向かって、井戸塀太郎が話しかけた。こうして対峙して一週間余りが経過していた。
「あの場所が気に入っていたのはわかっている。でも、あの店主では君の言葉を聞くことはできないだろう。君の魂を救済することはできないんだ」
天井の光源が揺らめいた。蛍光灯がチカチカと点滅を繰り返した。暗闇に包まれたとき、奔流のような感情が流れ込んできた。ありありと網膜に映像が浮かんだ。
大陸の広大な平原だ。リンゴのような赤いほっぺの少女が走っている。土ぼこりを上げながら数騎の馬が追いかけてくる。奇声を上げながら、馬上の髭面の男が少女に向かって飛び掛かった……。
窓の外が次第に明るくなった。庭の山桜はもうすぐ満開になる。老作家は、静かに目を開いた。頬には涙の跡が残っている。長い長い物語が、ようやく終わったのである。
井戸塀太郎の新作が上梓されたのは、それから半年後のことである。

《参考文献》「美しい日本語帳」（永岡書店）

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●営業時間 :9:30~19:00　●TEL: 090(9913)3052
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

＜広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円＞

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「法隆寺金堂炎上」

遠山彰 著　朝日新聞社

平成元年に夕刊紙に連載された記事を書籍化。昭和24年1月26日払暁、世界最古の建造物である国宝・法隆寺金堂が炎上した。原因は、壁画を模写していた画家が使用していた不良品の電気座布団かと思われたが、配電室の電源を切っていたとの証言もあって原因追及は迷走する。火災の一週間前に起った寺内の内紛による「毒殺未遂事件」との関連も取りざたされ、放火説も喧伝された。

まるで上質なミステリーのような読後感。それにも増して、明治の廃仏毀釈の猛威や、個人の献身によって貴重な文化財が守られてきた経緯に驚かされた。三次在住の日本画家、桑原清明氏が証言者として登場している。

「なめくじ艦隊」

古今亭志ん生 著　ちくま文庫

落語家は名前を変える度に出世するものだが、志ん生は芸名を16回も変えている。すべて襲名したものではなくて、借金や面倒事から逃れるため。家賃が払えないから転居を余儀なくされて、たどり着いたのが家賃タダの長屋。雨が降るとすぐに浸水、じめじめしているので巨大なナメクジが押し寄せて来る。夜になると蚊軍の襲撃だ。

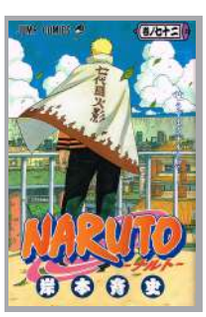
13、4歳の頃から酒やバクチを覚えたという。改心させるために奉公に出されるが、辛抱できるはずもなく噺家の世界に。寄席に通う電車賃がなくてテクテク歩いたり、一枚の羽織を舞台で交代で着てしのいだりと、悲惨な貧乏譚がたまらなく愉しい。

「NARUTO- ナルト -」

岸本斉史 著　集英社

漫画週刊誌「少年ジャンプ」の黄金期を支えた大ヒット作。他の漫画本と一緒に 30 巻ばかり持ち込まれたのだが、やばいな、と思いつつも読み始めるともう止まらない。後続は自分で購入、全 72 巻を短期間で読破した。

火の国の木の葉隠れの里、忍者アカデミーに通う、うずまきナルトが主人公。落ちこぼれ忍者のナルトが、里の長である火影を目指して成長してゆく物語。華々しい忍術の戦闘シーンの裏で、「何故戦うのか」ナルトは自問することになる。民俗や伝説、宗教や哲学のエッセンスを散りばめて、重層的な世界を構築している。戦争や紛争がなくならない人類への提言でもある?



どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣 (店内専用通貨) であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくろ俳壇＆歌壇

冬晴れの児童公園アドバルン　竹地 恵美

思い切り迫り出している冬大根　冨久 光

目も鼻も置きどころ無き花粉症　片岡 正人

菜の花に籠り人も笑顔かな　隆愚

薄氷（うすらい）をヒールで砕く待ち合わせ　大槇 三代子

春の海寝釈迦の雲さん何処行こう　赤川 冬人

うす闇に真白（ましろ）な花はほころびて　松岡 初枝

野梅はしばし華やぎの季節（とき）

※参加を歓迎します。

投稿＆寄稿

「干支の不思議」　M・A

今年は子（ね）年、つまりネズミが干支である。どうしてネズミが干支の最初に来るのか、そして、今まで不思議に思っていたのだが、どうして猫が仲間外れになっているのか。その答えが書いてある本に出会うことができた。「十二支のはじまり」という絵本。

昔むかし、神様が世界中の動物を集めて「正月の朝、挨拶にきた十二匹の動物を、早い順に一年の間、大将にしてやろう」と言ったそうな。

ところが猫は居眠りをしていて、その話をよく聞いていなかった。ネズミに日にちを確認すると「一月二日」だと嘘を教えられた。

さて、正月の前の晩、牛は「ぼくは足が遅いので今のうちから歩いて行こう」と夜のうちに出発した。それを見ていたネズミが、ちゃっかりと背中に便乗した。

夜が明けて、牛が神様の御殿の門に一番にたどり着いたのだが、門の扉が開いた瞬間、牛の背中から飛び降りたネズミが神様の前に飛び出して新年の挨拶をした。だからネズミが一番で牛が二番目。

次々と動物たちが姿を現して十二支の大将が決まったが、ぎりぎりで間に合わなかったのがイタチ。かわいそうに思った神様が「月の始めの日をおまえの日にしてやろう」と月の最初を「ついたち」と呼ぶようにした。

さて、翌日の二日、我こそは一番乗りだと意気揚々とやって来た猫は「挨拶に来るのは昨日だ。おまえは寝ぼけているな。顔を洗っておいで」と神様に叱られる始末。騙されていたことを知った猫は、ネズミの姿を見ると追いかけるようになった。そして、神様に言われた通り、暇があればせっせと顔を洗うのだという。

学術的には、十二支は木星が十二年で天を一周することからきている。中国の古い天文学で、毎年の木星の位置を示すために天を十二分した時の呼び方。この十二支に、わかりやすいように動物の名前を適当に当てはめたというのが定説で、干支の動物に特に理由はないそうだ。

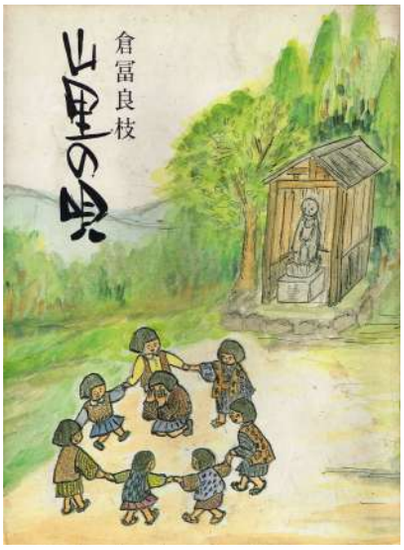
今回の民話は日本流にアレンジされた昔話で、日本各地で語り継がれているというが、うまく考えたものである。子供の頃、夢中で見ていた「トムとジェリー」のアニメも、この話を知っていたら、いつも騙されているトムに肩入れしていたかもしれない。

郷土の本棚⑩（文責・赤川仁洋）

「山里の唄」（山口新聞社）　倉富良枝 著

今回の郷土の本棚は番外編で、山口県都濃郡鹿野町の金峰菅蔵（みたけすげぞう）山麓で生まれ育った著者のエッセイ集。山口新聞に週一回「山里の唄」のタイトルで、平成三年六月から二年間連載した百編と、『こぼれ話』として平成七年九月から一年間「続山里の唄」の五十編を一冊にまとめたもの。

今月の三冊で紹介させてもらうつもりが、読み進めているうちに、それではもったいないという想いを強くした。同じ中国地方ということで訛り言葉にも親近感がある上に、書かれている山里の雰囲気がこの県北の地とよく似ているのだ。著者自身が描いた表紙の絵や文中のイラストも、素朴な味わいで楽しい。



農家の家族はみんな働き者だ。田畑の農作業はもちろん、冬の農閑期にも石臼で粉ひきをしたり、藁（わら）仕事に精を出している。縄をなうのはもちろん、藁は筵（むしろ）になったり、米俵にもなる。他にも穀物を入れる叺（かます）、日覆（ひおい）や包みものにする菰（こも）、ものを入れて運ぶ大小の「ほぼら」、藁草履……、数え切れないほどだ。

植林についての話では、思わず深く頷いた。著者の祖父が熱心に植林を始めたのだが、養子だった祖父と舅（しゅうと）のジイジイは意見が合わず、山の事でもよくもめていたそうだ。

「好はぁ（祖父のこと）は、雑木を売ってはその跡地に杉や桧を植えよるが、山をボロ（だめ）にする。見た目は杉や桧が育って美林に見えるが、あの木じゃぁ山は育たんのでよ。山の土はボロボロになるいの」

杉や桧では保水ができない。クヌギやナラは葉が落ちて肥やしになる。切っても、根を広く張っているから、芽を出して再生する。

お菓子が貴重だった時代で、子供たちは干柿にするときに剥いた柿の皮を干して、それをおやつにしていた。「吊し柿」という言葉が出てきて嬉しかった。柿のヘタを小縄の依り目にねじ込んで吊るす干し柿は、「吊（る）し柿」の名称が子供の頃から馴染んでいる。

春のお彼岸は「みなごろし」、秋のお彼岸は「はんごろし」。お餅は蒸した米粒を搗きつぶして作るから「みなごろし」、おはぎは炊いた米粒を半つぶしにして作るから「はんごろし」。ここ県北でもそんな呼び方をしているのだろうか。おはぎは特別の日のご馳走である。

著者の集落は大師信仰が盛んで、「お大師まいり」（八十八か所霊場めぐり）が熱心に行われていたという。札所は広範囲に点在しているので、二泊三日の日数がかかったようである。白装束に金剛杖をついた先達（せんだつ）さんを先頭に、長い列が続いた。

お歯ぐろの話にはたじろいた。隣家の『おばば』は、古釘や鉄屑を拾って持って行くと、大喜びして黒砂糖のひとかけらを新聞紙にくるんでくれたという。「ぽんぽら」という竹筒の中に、よく乾燥させた「ふし」（ヌルデの木の葉につく虫の巣）の白い粉を入れ、それに沸騰した番茶を注ぐ。さらに盃一杯の酒を入れ、囲炉裏で真赤に焼けた釘と鉄屑を投入。「ジュワー、ジュワー」とひどい臭気だ。

板切れでぽんぽらに蓋をして薄暗い土間の隅に置いて数日したら、鉄漿が完成する。それを羽楊枝（はねようじ・鶏の羽根で作る）で歯に塗って染めるのだ。見た目もグロテスクだが、製造方法もなんだか魔女の秘薬のようではないか。

読了して、何歳ぐらいの人が書いたのだろうかと経歴を確認すると、倉富さんは大正十五年三月生まれ。三か月ほど前に亡くなったわたしの母親と同じ年ではないか。母親は四月の生まれである。

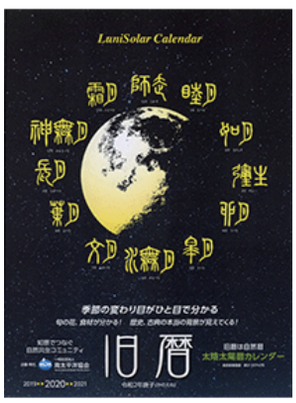
読んでいるときの心地良さの理由がわかったような気がした。母親から子供の頃の思い出を聞かせてもらっているような感覚だったのではないか。

どらくるあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート
・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日（10:00 ～ 12:00）
連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和2年度版、好評販売中！

※今年はうるう月のある年です。

“がらくた座ちいおばさんの人形劇”

■2020年 3月 26日（木）
■10時開演　会費は無料!
■会場 萬福寺　庄原市是松町 227
☎0824-72-0292
■問い合わせ　萬福寺
（タカハシ☎090-1184-0736）

長野県松本市から、
がらくたから生まれた人形たちとちいおばさんがやってきます。
こどもから大人まで一緒に楽しく遊びましょう!
※前日 25 日（水）夜 7 ～ 9 時、
ミュージカル『はだしのゲン』の録画上映会を開催。
部屋の都合上、参加希望者は事前連絡をお願いします。

編集後記

◇今回で本誌も丸四年、次号からは五年目のスタートになります。
◇「旧三上郡三十三か所霊場」もようやく結願、一年半の時間を要しました。取材ではなく、当時の巡礼者のように徒歩で札所巡りをしたいものだと考えています。テントが必要かもしれませんが。
◇先月号の「現代御伽草子」で、ニラと間違って食べたのは「スズラン」ではなく「水仙」です。スズランの葉は丸くてニラとは違います。読者から指摘を受けました。謹んで訂正させていただきます。
◇二月を全休しての古本の在庫整理も道半ば、やり残したものはまた来年の二月に（苦笑）。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 230 回

しょうばらくんちいち

「庄原九日市」

令和２年 ３月９日（月）　9:00～13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

令和元年度庄原市文芸大会入賞作品展

とき：３月８日～１０日　１０時～１５時

★どら書房　→休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休みです。

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座で「まかない食堂」開催！！

１０：３０～１２：００　　そば　１杯　６００円

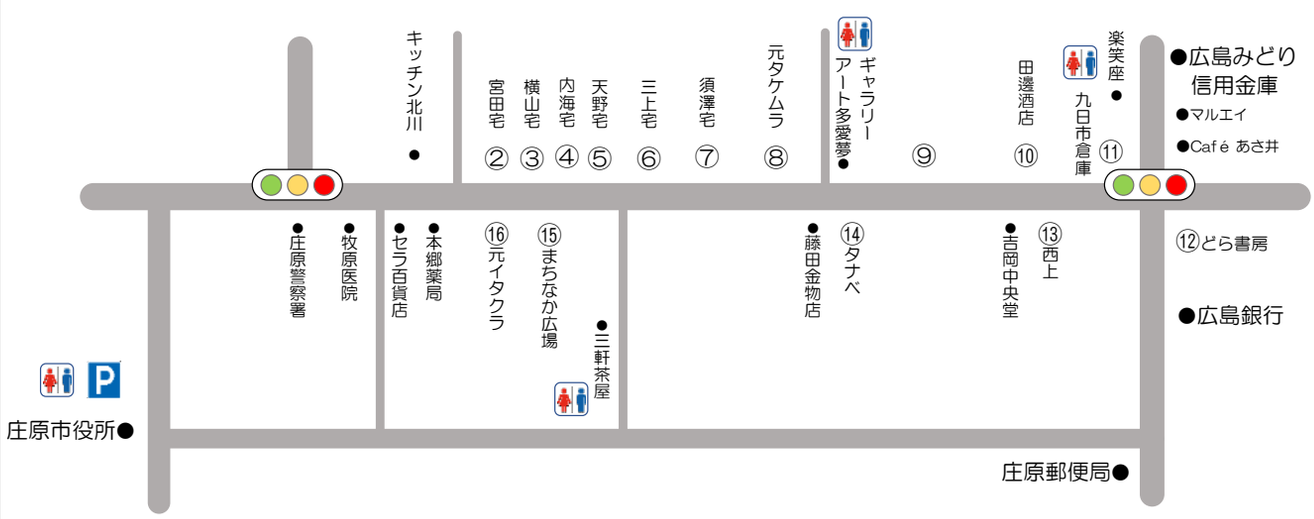
★楽笑座で「うた声喫茶」開催！！

１３：３０～１５：００　参加料５００円

★きくや　→総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍　→九日市スペシャルで餃子２００円！

出店配置図



②タラワーフード

③文屋

④お福
郷屋

⑤工房アム
かぐや姫
ぬくもり
ちくちくはうす玉手箱
832g の奇跡

⑥めだかの学校
美・sfida・三次サロン
和み屋
クラフトショップ

⑦農楽会

⑧とらぢ
二ハそば加工所
アーミッシュ
さだっさ
ふくふく牧場

⑩克國水産

⑪お休み

⑫どら書房

⑬久代水産
くんえん工房　香豚
コイケ物産
吉備路花田ＦＦ

⑭まなべ商事

⑮昭助
どんぐりーず
宮川屋
佐藤園芸
田崎屋

⑯前場衣料

出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～　九日市愛好会事務局
〒727－0013　庄原市西本町 2－1－10 楽笑座内　TEL/FAX　0824-72-8285

ホームページ
http:www.kunchi-ichi.jp